

堀江英一著

明治維新の社会構造

「近代産業史研究」や「封建社会における資本の存在形態」などで、幕末維新史にかんしていつも独自の仕事をすすめてきた堀江英一氏の新著である。

著者はこの本を、前著「封建社会における資本の存在形態」における経済主義を克服しようとして書いた。前著で著者は、幕末維新期の経済発展段階がマニユファクチュア段階ではなく小営業であつたとする「幕末維新小営業段階説」を、特定の階級闘争・政治闘争を規定する経済上の規定として示そうとこころみだが、完成することができなかった。その非常に大きな理由として著者は、「わたしばかりでなく、ほとんどすべての経済史家が、経済が直接に政治を規定するという安価な経済主義にとらわれていたことである」とのべ、「『社会構成史体系』を書いたひとびとが、ひそかに構成史体系派とよばれるにいたつたのは、理由のないことではなかつた」と自己

批判をしている。そして、この経済主義からぬけだそうとした努力の結果がこの本である。

社会構成史の克服は、いまわたしたちが当面しているだいたいの課題である。とすれば、右のような著者の意図が、どのていどの本につらぬかれているかをみてゆくことも、あながちむだなことではあるまいと思う。

著者のいうところはこうである。幕藩体制における基本的な矛盾は、幕藩領主と農民階級の矛盾・対立である。これはつまり、農民階級の領土所有と胚芽的利潤を前進させようとするところから生じている。領土は、かかる農民のブルジョア的な発展をおさえ、その成果を自分の方に吸いとりとうとする。この二つの階級が対立しあい、ぶつかりあひながら全体として歴史が進む、というわけである。

だから、農民層内部における対立——村落支配者層と一般農民層——は、幕藩体制のもとでは従属的な矛盾となる。農民一揆の形態も、農民層全体が領主に反抗する惣百姓一揆が基本的な形態であり、村落支配者層を打ちこわす世直し一揆は従属的形態といわねばならない。

ところが農民層のブルジョア的な発展は、一方で領主対農民層の基本矛盾を農民層に有利に解決してゆくが、他方でその分解をうながし、しだいに従属矛盾が拡大し、これが前面におしだされてくる。村落支配者層は、明治維新の全過程をつうじて政治的に進出し、みずから幕藩体制を倒し、絶対主義天皇制の藩屏となり、獲得した胚芽的利潤をみずからものにすするため寄生地主となつて、絶対主義天皇制の階級基礎となる。

絶対主義天皇制のもとにおける基本矛盾はこうして寄生地主と小作人との矛盾対立となるのである。著者は右のような論理のあらすじを第一章に示し、明治維新に対する分析視角を幕藩体制から、より資本主義の発展に適合した絶対主義天皇制への階級関係の変更、としてとらえることをあきらかにする。そこで「階級関係のどうした変更であつたか」を説明するために、第二章では天誅組や生野の義拳、奇兵隊、大塩の乱その他飯田、福島、秩父事件などよく知られた史実の分析を通じて維新の主体を追及し、続く第三章でこれら農民一揆の構造分析から惣百姓一揆とその下で渦まく世直し一揆の連関の中に維新の階級関係をみようとす。第四・第五章ではこうした

階級關係を生み出した基礎としての經濟構造、すなわち領主的商品經濟と農民的商品經濟の對抗と、農民的商品經濟の分裂——寄生地主制の成立を、前記の一揆が生じた地方を中心として分析し明らかにしてゆく。これを要するに明治維新は村落支配者層の政治的進出過程であり、それは同時に寄生地主的土地所有の確立過程でもある。その期間はしたがって、天保八年大塩の乱から明治一七年の秩父事件に至るほぼ五〇年の間となる。第六章は、かかる「維新の主体勢力が明治維新によつてつくりだしたもので、いわば維新の成果」として、經濟的には第一に農民的土地所有の確立、次にその分解の上に成立する寄生地主制を、政治体制としては絶対主義天皇制の確立を示すのである。かくして維新の成果としての寄生地主的土地所有は、ブルジョア的な發展の所産としての農民的土地所有の分解から生じたものであるがゆえに、それ以前の幕藩領主的土地所有とはくらべものならぬ零細耕作者の自由——ブルジョアの發展（分解）の自由を内包することとなつた。

幕末維新の時期にかんして出た戦後の無數の個別的実証的研究が、ともすれば各人各様の方法でそれぞれの結論を出したために、

それらの統一的理解と把握が妨げられ、研究の頭打ちを來していた最近の実状からみて著者が以上にのべたような論理をうち出したことは、まことに時宜に適したものとといわねばならぬ。經濟主義を克服するために、それぞれの体制の基本矛盾を明かにし、農民一揆を媒介として經濟構造と政治構造の結合をかけた著者の方法は、その内容の成否にかかわらず現在の研究をすすめる上に見落すことのできないであろう。

しかし經濟主義の克服は、そうした「方法」だけで果しておこない得るものであろうか。という疑問をこの本は抱かせる。

たとえは著者は、尊攘討幕運動も、自由民権運動も同様に村落支配者層の政治的進出の過程、同次元の運動としてとらえてゐるが、その理解の基礎には、両者が同じ經濟上の發展段階に成立したものととして、そのことによつて本質が等しいものであるとする考え方があつた。これでは「經濟が直接に政治を規定する」という安価な經濟主義」を十分にのりこえてゐるとはいふ難いし、事実尊攘討幕と自由民権の思想のちがいはもちろん、運動自体の性格のちがいと二つの間の發展をよみとることのできない。この二つの運動をささえたもの

が、ひとしく農民的土地所有の前進であると著者はいうが、農民的土地所有の真の不在は中農層にあるのであり、その要求がたとえは庄司吉之助氏が紹介されているように世直し一揆の中に「土地均分」として出てゐるのではないだろうか。そうとすれば、生野の義挙や福島事件などのような尊攘討幕、自由民権の運動に並行して激発する世直し一揆を、單純に従屬矛盾であるとしてよいものかどうか。

著者の分析視角は先にのべたように「階級關係の変更」それ自体に向けられており、その視点は村落支配者層の立場におかれてゐる。したがつて、それがいかに資本主義の發展により、適合した階級關係をつくり出したかという点のみが強調される結果となり、寄生地主制が資本主義の發展を妨げているという明白な事實の説明がこの本の論理をもつてはきわめて困難となる。寄生地主制にささえられ、特殊な發展をした日本の資本主義をそのまま当然のものとしてとらえるところから、この現にプロレタリアートを析出した土地所有制度の成立の前提として、農民的土地所有の確立というかなり実体の不明瞭な理論を生み出さねばならなかつたのではないか。

もし著者が、そういう歪んだ資本主義を何とか変えなければならぬところから出発したならば、現実の農村で農民的土地所有が確立されていないために資本主義的な分解が妨げられているという事実が見逃されるはずはなかつたと思うし、寄生地主的土地所有が、世直し一揆の中にあらわれた農民的土地所有の要求を圧殺した上に成立したということが明かとなり、すなわち農民的土地所有の確立と分解の上にそれが成立したという理論は出てこなかつたと思う。

このように農民的土地所有を成立させようとする世直し一揆の視点から分析がおこなわれたならば、同じ方法でもつしても村落支配者層の進出だけを一面的にとり上げ、歴史に対する見方をせまくすることはなかつたと思ふ。そうすれば、打こわしに直面した村落支配者層が、崩壊寸前の幕藩領主との間にもつ矛盾の表現である尊攘討幕運動と、その結果成立した「有司専制」の明治政府との間に生ずる矛盾の一表現としての自由民権運動とおのずからその本質を異にしたものとして把握されたはずである。経済主義の克服は、そうした立場からひとつひとつの階層の間の矛盾を明らかにしてゆくところからはじめて可

能となるのではないだろうか。

以上において、わたくしはかなり無しつくな、また現に学恩をうけつつある著者に対して甚だ非礼なことばの数々を重ねたが、それらは全く著者の出した問題をわたくし自身の問題として、ひとごとならぬものとして受けとつたところからきたものであることを明らかにして、著者並びに読者のおゆるしを得たいと思う。(二二〇頁 三〇〇円 有斐閣)

—朝尾直直—

京都大学東洋史研究会編

中国随筆索引

久しく待望されていた中国随筆索引が京都大学東洋史研究会編として刊行された。菊版千餘頁の巨冊である。売価千円というような低廉な価格で研究者の座右に備えることの出来るようになったことは、黙々と多年この書の編纂に従つた人たちのみならず、われわれの心から喜びとすることである。巻頭には宮崎教授の序文が巻末には佐伯助教の跋文があり、この書の成立した経緯やその内容や意義などを述べ、あたかもよき解説的役割を果している。佐伯富君をはじめ荒木敏一・愛宕

松男・岡本午一・池田誠・岩見安君らの諸士が昭和二十四年以來、月一回つづ東洋史の研究会を開き、爾來二百回にも及んでいるのであるが、同会の一成果として本書は出来上つたものという。

唐から清末に至るまでの小説・故事・遺聞・掌故・考証などに関するいわば随筆雑書となつげらるべき百六十種について、その内容の題目を収録し、これを題目に使用されている主要語によつて五十音の順に排列し、検索するのに便利ならしめたものである。唐が三、宋が四八、金が一、元が三、明が一九、清が七九。太平広記のごとき巻数の多いものを初め、夷堅志・容齋隨筆・癸辛雜識・東京夢華錄・武林旧事・輟耕錄・湧幢小品、或はまた事物紀原・困学記聞・日知録・陔餘叢考・二十二史劄記などの主要な書を網羅している。「この中には堂々たる考証的論文があるかと思えば或は正史の欠を補うに足る貴重な史料が潜んでいる。しかも各篇の題目録が巻頭に集められているのはよい方で、時に各巻に分散していたり、時には全くない場合もある。中国随筆索引はこの不便を緩和する使命をもつて現わされたものに外ならない」と宮崎博士が推賞せられておられるよう